

3 小樽雪あかりの路と街の印象

日記より～（はじめて小樽に入ったときの印象）

「その日は吹雪いていた。小樽では日常的なのだろう気象を体験できて嬉しかった。真っ白に敷き詰められた幅広の絨毯のような一本道に導かれ、やわらかい雪を踏みしめ、脇に目をやるとかわいらしい雪のオブジェ。キャンドルの灯は時に薄赤く、時に薄青く発光していた運河にたどり着くまでの路で、細かな芸で温かい歓迎を受けたような気がした」

昨年の「小樽雪あかりの路 11」の開催中、本格的な寒さの中で感じることはできたのは、何とんでも「温もり」だった。ボランティアの人たちが、消えてしまったキャンドルに一生懸命、灯をともしている姿を見て、ひとつの句が思い浮かんだ。

「雪あかり 心の芯に 灯をつけて」（ゆきあかり こころのしんに ひをつけて）

そして、印象深かったのは、会場一体の静かな雰囲気。雪が音を吸収するためか、多くの人たちが行き交う運河の散策路も、予想以上に静かだと感じた。

「音を吸い、静けさ残す 雪の路」（おとをすい しずけさのこす ゆきのみち）

散策路の側面をなぞるように存在する雪のオブジェに見入る人たちが、ときどき感嘆の声を発し、みな、自分と同じように驚きや感動、笑顔に包まれていると感じた。知らない人どうしでも、その気持ちを一つにまとめる不思議な力を持つ「小樽雪あかりの路」。

ライトアップされる夕暮れ時からさらに時間が経過したとき、石造倉庫群の表情が暗闇の中、実に幻想的に浮かび上がった。そして、ガス灯やろうそくの灯がともった運河の浮き玉とともに、光と影の見事なハーモニーが出現し、佇む人たちを魅了した。

「浮き玉の 灯りゆらめく 暗闇に」（うきだまの あかりゆらめく くらやみに）

「運河には 光と影の ハーモニー」（うんがには ひかりとかげの ハーモニー）

外国からのボランティア、市の内外の人たちを合わせて、長期間に渡る大変な労力、準備があっただけあって、あたり一帯の情景は本当に素晴らしく、溜息混じりの白い息が出た。

それから手宮線の跡地に向かった。人が少なればどこかうら寂しさが漂うだろう手宮線の跡地に、多くの人が集まり、発する言葉も騒がしくなく、静謐な雰囲気を感じた。そんな中、雪の丘の上に立っていた、きらめく大きな十字架が私の目に飛び込んできた。こんなところに「輝きのロザリオ」！と思わず心の中で叫んでしまった。そこに小説のタイトルとし

て考えていた「輝きのロザリオ」のような十字架のモニュメントが立っていたことに驚き、心打たれて一句。

「ロザリオの 輝き増せる 雪の丘」 (ロザリオの かがやきませる ゆきのおか)

以下は、その一年後、今年の「小樽雪あかりの路 12」のときに撮影した写真である。



小樽雪あかりの路 12
(写真提供・道伝はるか)

<街の印象>

私は小樽の街で何かを見る度に、様々なものに例えたくなくなった。まず、多かったのは男と女。小樽が華やかだった明治、大正、昭和初期のように、男女間で状況や精神性に大きな違いがあった時代には、男性は女性よりも大きなスケールで動こうとし、女性はひっそりと佇んでいるような印象がある。たとえば「中央通り」や「浅草通り」には、懐の広い男性的な印象を感じた。

「懐の 広い男の 大通り」 (ふところの ひろいおとこの おおどおり)

また、大通りは仕事の舞台である海へと続く道ということで、以下の句を詠んだ。

「花道は 海へと続く 大通り」（はなみちは うみへとつづく おおどおり）

裏路地には女性的な印象を重ね合わせた。

「ひっそりと 女たたずむ 裏路地に」（ひっそりと おんなたたずむ うらろじに）

通りを走る人力車は装いも美しい女性を乗せる男性的な印象に写った。

「麗しき 装い乗せる 人力車」（うるわしき よそおいのせる じんりきしゃ）

洋館は女性的にも男性的にも見えた。女性が望む美や夢を形にする男。

「洋館に 女と男の 夢のあと」（ようかんに おんなとおとこの ゆめのあと）

洋館を小樽の象徴と考えると次の様な句になる。

「小樽には 女と男の 夢のあと」（おたるには おんなとおとこの ゆめのあと）

一人で誰かを想う人にも小樽という街は似合っている。

「かの人を 想える街の 白吐息」（かのひとを おもえるまちの しろといき）

小樽という街は、実に様々な印象を写し出す。薄暗い印象もよく似合う。運河には、ときどき霧がかかったような幻想的な雰囲気が出て、絵画でもよく描かれていることから、その情景に魅了された人が多いことがわかる。

「薄霧に 靴音響く 人の影」（うすもやに くつおとひびく ひとのかげ）

小樽という街の雰囲気は、暗闇の中、光を放つランプやガラスを連想させる。

「闇夜には 足元照らす ランプの灯」（やみよには あしもとてらす ランプのひ）

「輝きを 放つガラスの 光の矢」（かがやきを はなつガラスの ひかりのや）

ガラスはまた、強さ、はかなさ、繊細さなどを合わせ持つ印象がある。

「合わせ持つ 強さ・はかなさ ガラス色」（あわせもつ つよさ・はかなさ ガラスいろ）

画家は絵画、写真家は写真、歌人は歌、詩人は詩、小説家は小説を通してなど、表現のジャンルは違えど、街が写し出す印象をどうにかして表わしたくなる気持ちにさせられるという点では、同じように思う。